

『パラケルスス』の構造的な研究

吉 門 牧 雄

第1節 『パラケルスス』の構造

ロバート・ブラウニングが1835年8月15日に出版した『パラケルスス』は、詩人が23歳のときの作品で、その後ブラウニングが多くの作品の中で展開した基礎的なテーマである「未完成の哲学」や「憧れ」が内包されている極めて重要な作品である。¹ 本論文では、『パラケルスス』という作品全体の構造に焦点を当てて、なぜこのような構造を有するに至ったかを論じる。この作品は五幕からなる劇の形を備えており、それぞれの幕には次のようなタイトルがつけられている。

PART I PARACELSDS ASPIRES

PART II PARACELSDS ATTAINS

PART III PARACELSDS

PART IV PARACELSDS ASPIRES

PART V PARACELSDS ATTAINS

このように、この作品は第3幕の「パラケルスス」を挟んで左右対称の構造になっている。すなわち、第1幕と4幕が「パラケルススは憧れる」であり、第2幕と5幕は「パラケルススは到達する」となっている。つまり、真ん中の「パラケルスス」を挟んで、「パラケルススは憧れる」と「パラケルススは到達する」のペアが繰り返され、一見単純な構造のように見えるが、その内容は表面的な意味とは別の様相を呈し複雑である。

まず、分析の前提として、ブラウニングが歴史上のパラケルススについて、どのような知識を持っていたかを概観する必要があるが、ブラウニング自身が『パラケルスス』の執筆において利用した資料としては、『万有人物伝』(*Biographie Universelle*, 1822) フレデリック・ボティスキウス編集の『パラケルスス著作集』(1658)、特にその序文、さらに、ミルキアー・アダムが著した『ドイツ人医師たちの生涯』(*Vitae Germanorum Medicorum*, 1620) などがあるが、² この作品の最後に掲載された‘Note’の多くの部分は『万有人物伝』の中の「パラケルスス伝」から採られている。この伝記を用いたのは、それが最上のものという意味ではなく、手近にあって簡潔であり、この作品を理解する上で十分な内容を有しているからだだと述べた上で、ブラウニングはフランス語から英語に訳しているが、その内容は以下の通りである。

パラケルスス (フィリップス・アウレオルス・セオフラスタス・バンバスタス・ホーエンハイム) はチューリッヒから数リーグ離れたシュウィーツ州の小さな町であるアインジーデ

ルンで1493年に生まれた。カリンシアのフィラッハで医者の仕事をしていた彼の父は、後にマルタ修道会の大修道院長になったジョージ・ボンバスト・デ・ホーヘンハイムと近い関係にあった。結果として、パラケルススは、彼の天敵トマス・エラスムスが主張するように、人々のくずから出てくることはできなかった。彼の基本的教育は大いにないがしろにされ、彼は青春の一部分をその時代の旅する学者たちに共通の人生を送って過ごした。

つまり、国から国へと放浪しつつ、占星術によって未来を予測した。霊を呼び戻したり、魔術と錬金術の様々な作用を行なったりした。彼がそれを学んだのは、彼の父からか、様々な教会人からであった。その中の一人として、彼は大修道院長トリセイムや多くのドイツの司教を挙げている。

パラケルススはいたるところで最も普通の知識の初歩を知らないことを表しているが、おそらく学校で真面目に勉強しなかったのだろう。彼はドイツ、フランス、イタリアにある大学を訪れることで満足していた。そして、彼は自分がそれらの大学の華であったと自慢してはいるが、彼がいう博士の称号を合法的に獲得した証拠はない。彼がシュワッツの裕福なジキスモンド・フッガーの指示で大作の発見に長い間従事したことだけが知られている。

パラケルススではボヘミアの山脈、東部やスウェーデンを旅した。鉱山夫の労働を視察したり、東洋の熟練者の神秘を学んだり、自然の秘密や天然磁石で有名な山を観察するために旅をした。彼はまたスペイン、ポルトガル、プロシャ、ポーランド、そして、トランシルバニアを訪れたと告白している。至る所で、これらの国の医者ばかりでなく、老婆、にせ医者、魔法使いとも自由に交際している。

彼はエジプトやタタールまでも足を伸ばし、タタールのハーンの子のお供をしてコンスタンチノーブルへも行ったとさえ信じられている。その首都に住んでいたあるギリシャ人からヘルメス・トリスメギストス（ヘレニズム期のエジプトにおいて崇拜された神トトの異称）の元素（エキス）の秘密を得る目的であった。

彼がドイツに戻ってきた時期は知られていない。ただ、33歳の頃に、彼が著名人を癒した驚くべき多くの癒しで非常に有名になったこと、彼は1526年にエコラムパディアの推薦により、バーゼル大学で自然科学と外科医の職に就いた。そこで、パラケルススは大講堂において公開でアヴィセンナやガレノスの著作を焼き、彼の聴衆に、彼の靴の紐の方がそれらの二人の医学者よりも勉強になること、全ての大学と全ての作家が東になっても、彼の髭と頭に被せた冠ほどの賜物に恵まれないこと、つまり、一言で言えば、彼は医学の正当な王であると見做されるべきことを証しし始めた。

彼は叫んだ、アヴィセンナよ、ガレノスよ、ラシスよ、モンタグナナよ、ムセウスよ、モンペリエ、ドイツ、ケルン、ウィーンの紳士たちよ、ライン川とドナウ川が育んだ人らよ、海の島に住んでいるあなた方よ、同時にダルマティア人よ、アテネ人よ、汝アラブ人、ギリシャ人、ユダヤ人よ、皆、私に従え、君主国は私のものだ、と。しかし、バーゼルでは、新任教授はとんでもないもぐりの医者に過ぎないことがすぐに分かった。一年が経つ頃には、彼の講義は語気の強い専門用語を理解できない聴衆を相当に追い払った。彼の名声を傷つけるのに、とりわけ貢献したのは彼の放蕩の生活であった。彼と親交を持って2年を過ごしたオポリヌスの証言によるとパラケルススが講壇に上るときはいつも、半ば酔っ払っていた。そして、酔った状態の時だけ秘書に口述した。病人を往診するように呼び出された時は、必ず前もってワインをがぶがぶ飲んで、そこに赴いた。

彼は服を着替えずにベッドに入るのが、習慣だった。時折、彼は農民と共に居酒屋で夜を過ごし、朝には何をやっていたのか分からなかった。それにも関わらず、25歳になるまでは水しか飲まなかった。

ついに治安判事にひどい暴行をしたことで罰せられると心配して、1527年の末にかけてバーゼルから逃げ出し、アレサティアに避難した。私はオポリヌスに自分の化学の器具を持たせ、後に続かせた。

それから、彼はもう一度歩き回る神智学者の生涯に入った。したがって、我々は1528年にコルマーで彼を見つけた。1529年にはフェフェーズ、1536年にはアウグスブルクに彼はいた。次に彼はモラヴィアに滞在した。そこで、彼は多くの著名な患者さんたちを失ったことで、名声をさらに大きく傷つけた。そのことは、彼自身をウィーンへ行かせることになった。そこから、彼はハンガリーに向かった。そして、1538年にはフィラックにいた。そこで、彼は人々が彼の父親に尽くしてくれた多くの親切に感謝して、ケルンテンの諸州に自分の「年代記」を謹呈した。最終的には、1540年に訪れたミンデルハイムからパラケルススはザルツブルクに進んで行き、その地の聖ステファノ病院にて死んだ。ステファノはセバスチャンという意味である。それは1541年9月24日のことであった。

このような歴史的パラケルススの生涯についての知識に基づいて、ブラウニングは、パラケルススの生涯を詩作品にしているが、その中でも最も重要と考えられる時点を次のように5つ選んでいる。

- 第1幕 ヴェルツブルグ：郊外の庭園、1512年
- 第2幕 コンスタンチノーブル：ギリシャ人の魔術師の家、1521年
- 第3幕 バーゼル：パラケルススの家の部屋、1526年
- 第4幕 アルサティアのコルマー：ある宿屋兼居酒屋、1528年
- 第5幕 ザルツブルク：聖セバスチャン病院の部屋にて、1541年

ただし、この作品はブラウニングがしばしば用いた劇的独白の形を取らず、パラケルススの生まれ故郷アインジーデルンで共に育った友人としてフェスタスとミカル、そしてイタリアの詩人アプライルという架空の3人の人物を登場させて、パラケルススと対話させることにより、パラケルススという人物を立体的に描いている。この中で最も重要な脇役は間違いなくフェスタスであるが、この人物について、サザランド・オールは次のように述べている。

フェスタスは劇の間中、パラケルススの側にいる。深遠ではないが、思慮分別のある助言者であり優しい友人として、常に登場する人物である。彼の人柄は一つの類型としての重要性を主張するのに十分なほど特徴がある。彼はパラケルススとアプライルの両方を対比するとともに、二人の間の融合の絆として登場する。彼はパラケルススの告白に形を与え、それを単調さから防ぐために、単に劇的な目的のために創られたということはある。物語は主に二人の間の対話の中で語られる。³

このフェスタスは、第3幕では「静かな山の修道院に閉じこもった司祭」(Ⅲ：868)として平穏な生活を送っていると述べられているが、ミカルと結婚して、アエンチェンとアウレオレ（この子の

名はパラケルススの中間名の一つ「アウレオルス」に由来する)という二人の子どもがおり、また、マルティン・ルターに助言したいことがあって、彼のもとを訪れたことを明かす。こうしたことから、フェスタスはプロテスタント系の司祭として、宗教改革者たちの中で一種の仲裁者として行動しているのが分る。

第2節 第1幕の構造

さて、第1幕の舞台は1512年の秋の夜、ヴェルツブルグの郊外の庭園で、パラケルスス、そして、フェスタス、ミカルの三人が語りあっている。トリテミウス・フォン・スポンハイムは1506年、ヴェルツブルグにおいて聖ヨセフ大修道院の大修道院長に任命され1516年にその地で没している。この作品では、当時19歳の学生パラケルススはスポンハイムのもとでフェスタスと共に学んでいる設定になっている。このスポンハイムはまさに「知の巨人」と呼ぶべき人物で、神学、哲学、生物学、文学を習得し、さらに錬金術にも通じていて、魔術師としても名声を博していた。このような師から誰よりも熱心に学んだ歴史的パラケルススが通常の伝統的な医学の枠を超えて、魔術の世界に入っていったもの自然の流れであったろう。ただし、この詩の最初の部分では「黒魔術、偉大な業、秘密と崇高なものは、他の人たちにこれらを重んじさせよ」と言って、少なくともこの時点では、黒魔術等はいないという意思を表明している。ここでいう「偉大な業」とは、卑金属を金、銀に変え、寿命を伸ばす力をもつという「賢者の石」(パラケルススはそれを「アズス」または、「ラウダヌム」と呼んだ)を作る行程である。

このような状況の中で、パラケルススが抱く大いなる目的を遂げる旅に出発することを決心したパラケルススは、友人のフェスタスとミカルに別れを告げようとしている。フェスタスとミカルはできれば何とか彼を引き止めたいと思う。その一夜の語らいがこの幕になっている。彼らの共通の故郷は、スイスのアインジーデルンであるが、フェスタスはパラケルススよりも数歳年上であり、パラケルススのことをずっと見守っていた。

フェスタス：待ってくれ、ミカル。アウレオレ、君の過ちが何であろうと、これは君の無分別な選択ではなく、熱心な少年の突然の思いつきでもないことを、よく知っているの、私は深刻にまじめに語る。あなたの熱心な心がずっと昔に、この計画を生み出し、養い、ついに成就させていることを、私が知っているのは、あなた自身の打ち明け話からだけではない。私はアインジーデルンについては話す気はないが、そこで私は君よりも数年はやく生まれた。そして、あなたを初めから十分に見つめることになった。その上、大局において我々のお互いの仕事は定まっていた。あなたの最も大切な願いに報いるために、騒がしい心で、君は私と共に、子供の頃の棲家を離れて、ここで、トリセミアスが彼の知識の一部を教えていた少数の恵まれた者たちに加わった。君が今、軽蔑している非常に恵まれた者たちのうち、あなた程熱心に通ってきて、全てを理解し、全てを保持し、忍耐強い労苦によって、彼のよ

うな幅広い名声を受けるに相応しいものになろうと決心した若者は、一人もいなかった。
 今また、私は古い情熱に取って代わった、この新しい熱意を見た。 (I : 225-248)

彼は人類のために有益な真理を求めて旅立とうとしているのである。パラケルススは、従来の軌道に沿った学問に満足できない。それは、「過去の知識は人類に対して何もしていない」と感じているからである。悪との戦いにおいて最終的勝利を得るような、霊感的知識を手に入れたいが、それはきっと自然の中で孤独において与えられるものと、パラケルススは確信している。それはまるで、鳥が空の道なき道を翔り飛ぶような冒険であるが、彼は自分の決意をこう吐露する。

私は魂を証明しに行く！
 鳥たちが道なき道を見るように、私は自分の道を見る。
 私は着くであろう！
 どんな時、まず、どんなめぐり合わせかは問わない。
 しかし、神が雹や目潰しの火の玉や、霰や重苦しい雪を送らない限り、
 ある時、彼の良きときに、私は着くでしょう！
 神は私と鳥とを導かれる。神の良き時に！ (I : 559-565)

このような覚悟を持って、明日の朝には出かけようとしているパラケルススの姿は、フェスタスには「無遠慮」な試みと映り、パラケルススを人間の愛から切り離す危険があると警告する。フェスタスは、かつて誰も歩んだことの無い奇妙な道をただ一人で真理を探そうというパラケルススに対し、「あなたが何を訴えようとも、知識はあなたの愛の中で最高のものではない」(I : 419)と論ず。さらに、スタゲイロス人(すなわち、アリストテレス)やその周りにいる栄光に富んだ賢者たちに学び、その道を歩むことが学問の王道であると忠告する。

これに対し、パラケルススは本当の真理は先人の足跡を模倣し、書物を読むだけではつかめない。かえって、「無邪気にぶらぶら秋を過ごしている者たち」(I : 750)の中にあり、そこから、いかに真理を取り出すかが大事なのだ。真理に到達する道は、真理を隠す肉の幕を打ち破って真理の光が啓示されることだ。それ故に、真理の「幸運な出口」(I : 758)を見つければ良いのだ。そこには低きものと高きものの差別はない、と主張する。

実際、パラケルススは色々な種類の人と交わっていた。この点については、史的パラケルススの書いた「信条」(CREDO)という文章の中に、彼が伝統的な医学の知識では満足せず、各地を遍歴して優れた医術を学ぼうとしたこと、また、その際、「医者だけではなく、床屋、温泉管理者、学識のある内科医、女性、そして、癒しの術を探求している魔術師のところにも行き、さらに、錬金術師、修道院、高貴な方々、一般人、専門家、素人のもとにも赴いた」と回想している。⁴ このように、パラケルススはあらゆる種類の人から病を直す術を学び、人類に仕えようとした。それ自体はもちろん立派な目標であるが、問題は「仕えている人たちに、仕えられたくない」と彼が考えている点である。

パラケルスス：……もし私が人類に仕えることができたなら、それは良いことだ。しかし、そこで私たちの交わりは終わらねばならぬ。
 私は仕えている人たちに仕えられたくない。 (I : 611-613)

他人との親密な係わりを欲せず、ひたすら孤独な歩みを続けようとするパラケルサスの態度に対して、フェスタスは「最初から人間の愛に無関心である道がどうして安全であり得ようか」(I: 619-20)と警告を発する。そして、もし自分にパラケルサスほどの才能が与えられているなら、多くの愛する友人と共に苦勞と喜びを共有するだろう、と語る。

このようなフェスタスの諫めにも係わらず、パラケルサスの確信は揺るぐことなく、ついに勝利をおさめる。そして、彼は「私はこの聖なる知識を集めに行く。世界中のここかしこに散らされた知識を、長く失われ、一度も見つけられなかったものを」(I: 785-7)と自分の信念を明言する。このような目的は、史的パラケルサスが関心を持っていたカバラの思想から影響を受けているとも言える。カバラによると、無限者である神が宇宙を創造したとき、自らを収縮して空間を作り、その空間を光線で満たした。しかし、空間はその重荷に耐え切れず破壊され粉々になってしまった。それでも、破壊の結果生じたクリポート(殻)の中に神の光線が残っている。この神の光線をクリポートから開放することによって、宇宙の調和が回復される、と考えられた。⁵ 同様に、パラケルスも世界の散らされた神の知識を発見し、人類のために役立てようと志しているのである。

若き日のパラケルスは、黒魔術(悪魔の力を借りた魔術)などを使わなくとも、人類の進歩に貢献する隠れた知識を発見する確信と希望に満ちている。そして、ついに彼は旅立とうとするのだが、この時の彼の決意は、この幕の最後で次のような有名な詩行となって現われている。

パラケルス：フェスタスよ、親愛なるミカルよ、ダイバーの冒険には二つの要点がある。
 一つは、乞食が飛び込む準備をしているとき、一つは王子が真珠を持って上がって来るときがあるではないか。フェスタスよ、私は飛び込む！
 フェスタス：私達は君が上ってくるのを待っている！ (I: 828-832)

今は乞食のような存在であっても、真珠(人類を幸福にする究極的な真理)を見つけて、再び浮かび上がってくれば、もはや乞食ではなく、いわば王子である。冒険を恐れぬパラケルサスの若い決意が伝わってくる。この幕では、フェスタスは始終、常識的な見地に立って発言しており、若き学生パラケルサスの純粋な憧れがより際立つ効果を持っていると言えよう。

第3節 第2幕の構造

第2幕では、このように大きな野望を抱いて出発してから既に9年が過ぎ、彼はコンスタンチノーブルに住む、あるギリシャ人の魔法使いの家に滞在している。前述のように、第一幕でパラケルスは黒魔術のような手段は使う必要がないと語っているのだが、結局は魔法の秘密を見つけることを期待してここに留まっているのである。だが、魔法の秘密をいまだに発見できていない。彼は、自分の人生が取り返しのつかないほど浪費されたという意識に苛まれ、これ以上進むことは困難であると弱音を吐く。

さて！私はこれ以上進めない。
 良いにしろ、悪いにせよ、それは成されたのだ。

私は思いとどまって、機会を待たねばならぬ。
 私は拡張を続けられない。
 後ろ向きに縮むことはできない。
 それは、ただある自信を輝かせ、私の骨折りに近いあるものを見えるようにするなら、
 私はどんな犠牲を払っても進んでいく。
 もっともそれを終えれば、私は死んでしまうけれども。
 そうでなければ、ここで私は留まる。 (Ⅱ：56-62)

この第2幕のタイトルは先述のように‘PARACELSUS ATTAINS’（「パラケルススは到達する」）であるが、ここで言う到達は決して充実感を伴う目標達成ではない。それどころか、それは越えることのできない壁の前に立ち尽くす一つの行き詰まりにすぎない。彼は自分の人生を振り返って言う。人類のために隠された真理を発見しようという目的に自分を合わせ、決して後ろを見ることなく緊張の中でひたすら努力してきた自分であるが、気づかぬうちに現在のような自分になっていた。他のものを犠牲にしてひたすら目的のために邁進して来たのも、次のような願いを抱いていたからだ。

今は死に絶え、去ってしまった私の青春とあの素晴らしい希望を、
 燃える涙の中で泣かせてくれ。
 それらの代わりに、ある驚くべき秘密を確かに勝ち取れたらいいのに！
 若さでもって老年を元気づける力あるもの、黄金を生み出す力、
 それらがオパールの子に変わるまで、月光を閉じ込める力が欲しいものだ。(Ⅱ：189-195)

パラケルススは隠された「驚くべき秘密」の発見を求めているが、そのような物はなかなか見つからない。その上、今、初めに持っていた目的の純粋性も揺らいでいる。このような、行き詰まりの中で彼の心はいつしか故郷と青春時代を思い出す。

この狼のような知識への渇きが無常にも愛の主張をまだ打ち捨てていないときがあった。
 この心は、かつては人間らしいものだった。そうでなければ、今、何故アインジーデルンを思い出すのか。
 そして、マイン川が腕で抱こうとして流れを止めるヴェルツブルクを。
 そして、フェスタスを。
 私の気の毒なフェスタスよ、
 彼は私のことを称え、助言し、深刻に心配してくれた。
 ずっと前から彼の花嫁になっている甘い乙女とともに。
 彼は今どこにいるのか。
 私は確かに彼らを愛した。少なくともあの最後の夜に、
 それから、私たちは……過ぎたことだ！過ぎたことだ！それは良い。(Ⅱ：124-133)

こうしてパラケルススはフェスタスと彼の妻ミカルを思い出す。少なくともあの別れの夜には、彼らは自分を愛してくれたことを回想すると共に、大きな目標を与えられたときの喜びを思い起こす。

私の将来の計画に対する全ての煩いを捨てるように、
 気の毒なフェスタスに語るため、ある朝、終始喜びのあまり飛び上がりながら、
 名も無い鳥の群れを驚かせつつ、七つの小さな草の多い野原の上を走った。
 なぜなら、私は地上で最も偉大な最も栄えある人間になると、
 決心したところであったのだから。
 その朝以来、人生の全ては忘れられている。
 全ては一日の出来事、一日の最初と最後の間のただの一段階のことだった。
 一つの独裁的な考えが全てとなった。
 夢中にさせる目的が合間をうめる。

(Ⅱ：143-153)

ここには、ある日、最も偉大な人間になるという、とてつもなく大きな目標を与えられて、それをフェスタスに伝えようとして野原を駆けていった時の喜びが、感動的に叙述されている。若い頃に持っていた純粋な目的を失ったかのように思われ、その上、精神の墮落を恐れる状況であるが、その一方では、パラケルサスには「最悪の場合でも、私はその仕事で私の分担を果たした」(Ⅱ：90)という自負心があり、たとえ十分な成果でないとしても、人類に対して大きな利益があるとも考えている。

ただ、その思いを憤然と投げ返しつつ、自分の目的が相変わらず、
 至高で純粋なままであることを自分に確信させられたら。
 今でさえ、人類のためにもし私が失敗したとしても、欠点が原因となり、
 もし私が倒れたとしても、他の人が成功することを願ってもいいではないか。
 ああ、神よ、我々の卑しむべき心！
 この忌まわしいまがいを私の心から締め出して下さい！

(Ⅱ：195-202)

たとえ自分が失敗したとしても、この研究の成果を誰かが受け継いでくれるだろう、という思いが湧いてきたのだ。その時、彼の内側からの声が聞こえる。それは青年期にも聞いたことがあったが、声が低すぎてよく聞こえなかった。その声が聞こえる。世を救おうとしたが、理想も空しく失敗した先人たちの声であった。使命の遂行に失敗して、黄泉の国（あるいは、煉獄）に留まり、神から遠く離れ、また救うことができなかった世の人々からも遠ざかって、「鋭いかなしみを」新たにしている者らが、「失われた、失われた！しかし、来たれ、我々の力のない群れとともに汝の家を作れ！」(Ⅱ：297-9)、そして「汝の悲しい墮落について我々に語ってくれ」(Ⅱ：335)と語りかけてくる。

その時、文字通り突然、イタリアの詩人アプライルが入ってくる。このアプライルのいきなりの登場は読者を驚かすものであるが、後に、アプライルが「私は墓の中で忘れられて横たわっていた」(Ⅱ：363)と語っていることから、恐らくアプライルの靈魂が可視的な姿をとって現われたのであろう。アプライルの肉体は墓に下っているが、魂は生きていて、それが地上にあらわれたと見たほうが良い。この二人は正反対の性格なのだが、人生に失敗したという点では共通している。違っている点は、パラケルサスは全てを知ろうとしたのに対し、知ることを無視して、アプライルは無限に愛し、愛されたいと思ったことだ。

パラケルスス：アプライルよ、今後、私を愛してくれ、
 一方、私は愛することを学ぶ。そして、恵み深き神よ、
 我々二人を許して下さい！
 我々はずいぶんうんざりする夢から覚める。
 しかし、両方ともおとぎの国で眠ってしまった。
 この世は我々の前には暗く、わびしく見えるが、
 我々は手首と足首をなおも宝石で飾って目を覚ます。
 汝が愛することを求めて来たように、私は知ることを求めてきた。
 汝が知識を拒絶したように、愛を排除しつつ、なおも、汝は美を有し、
 私は力を持つ。我々は目覚める。
 我々二人のために、どんな苦行を工夫できるのか。 (Ⅱ：618-627)

知ることを拒絶して、愛し愛されることをひたすら求めて挫折したアプライルに対し、パラケルススは親近感を抱く。求める方向は異なるが、何か自分に似た生涯だと感じ、パラケルススには、アプライルが大切な存在に思える。アプライルが語る言葉に、パラケルススは期せずして自分の失敗の原因をさとる。彼の失敗は、愛を離れて、知ることのみを求めたからであった。そして、二人はそれぞれ重要な側面を現しており、お互いに分かれてはいけないものだと悟る。

パラケルスス：アプライルよ、死ぬな！我々は別れてはならない！
 我々是一个の切り離された世界の両半分なのか。
 このような奇妙な機会が我々をもう一度結びつけたのか。
 別れる？だめだ！汝、愛するものが知るようになり、
 私、知るものが愛するようになり、
 ついには、両方が救われるまでは。アプライルよ、聞いてくれ！ (Ⅱ：633-637)

先述のように、アプライルの肉体はすでに死んでいるので、これは靈魂の永遠の死、あるいは、滅びであろう。パラケルススは自分の救いのためにも生きて欲しいとアプライルの魂に呼びかける。

パラケルスス：生きてくれ！私にために、私の大きな罪のゆえに、
 これらの荒々しい言葉とその深い意味とによって圧迫されている私の脳を
 助ける。
 生きよ！遅すぎはしない。
 私には、私たちや友達のための静かな棲家がある。
 ミカルは汝に微笑みかけるだろう。
 聞こえるか、このように耳を傾け、近くに寄ってくれ。
 私はあなたの話の一つの言葉、一つの小さい語も逃さない、
 アプライルよ！
 アプライル：否、否、私に王冠をかぶせる気なのか。
 私はお前の仲間ではない！お前が探しているのは、彼だ、王だ。
 私は王ではない。

パラケルスス：少なくとも汝の魂を！私に愛させてくれ！

私は成し遂げた、そして、今、私は出発しよう。

(Ⅱ：651-661)

アプライルの言葉に自分の失敗の原因が、愛を無視して知識のみを求めたことであると悟ったパラケルススは、彼の言葉を胸に秘めて、新しい出発のときを迎える。それゆえ、ここでいう「私は成し遂げた」(“I have attained”)とは、決して一般的な意味での目標達成ではなく、一つの行き詰まりのことであり、それ故にその段階に留まることは許されず、次の段階への上進を模索する。

第4節 第3幕の構造

第3幕の舞台はバーゼルである。第2幕から5年の歳月が流れたが、今、パラケルススは自分の部屋でフェスタスと語り合っている。パラケルススはここバーゼルで市医となっているが、当時、市医は同時にバーゼル大学の教授を兼ねることになっていた。これは、当時の医学者にとっては最高級の出世であり、外見的には人も羨むような地位であったが、パラケルススには魂の満足感はない。外見的には一応成功したといえるパラケルススだが、決して安泰ではなく、発見すべき真理は相変わらず自分から遠く、失敗の人生だったとの自覚を持っている。実際、歴史的パラケルススも正教授として認められるためには、医学博士の学位取得を証明する必要がある。パラケルススはフェラーラ大学の学位を持っていると称していたのに、何故かそれを拒絶したため、学部当局は反発し、彼の市議会への抗議によって何とか市側の働きかけにより教職活動が可能になったが、それでも学部所属と、聴講者に対する学位授権は与えられなかったのである。種村季弘は『パラケルススの世界』の中で、そのような状況にある教授の講義に多くの学生が集まる訳が無いと指摘する。⁶

第2幕でのアプライルとの出会いにより、パラケルススは自分に足りないもの、そして、自分の失敗の原因を悟り、一時期は、アプライルのように愛するだけに生きようと試みてみたが、結局無駄であった。彼はこう告白する。

神よ！いかに私は少しの間でもあの狂った詩人（アプライル）のように生きることを試みたことでしょうか。

愛することだけを。

いかに私は酷く曲げられ、捻られ、形を歪まされたと感じたことか。

たとえ、骨折り仕事から解放されても、ご覧の通り弱々しくまごつき、

盲目で、痛みを感じ、私の古い生へ戻り、私が人生を始めたように死ぬ以外に、

私は何をしたらいいのか。

私は美のためののみ、美を糧とすることはできないし、

その愛らしさのゆえに、美しいものから香油を飲むこともできない。

わたしの生まれながらの性質は、その最初の刻印を失うことはあり得ない。

私は一つの秘めた目的を持って、今もって、全ての真理を溜め込み、

積み上げ、類別しなければならぬ。

私は知らねばならぬのだ！

どうか、神が私をその玉座にお移し下さるように、そして、私自身の目的を促進するために

は、私は彼の言葉に耳を傾けさえすれば良いと信じて下さるように！
 他の人々にとっては、美は惜しみなく撒き散らされている。
 そして、もし私が彼らのようにこの狂った栄えのない切望を消すことができるなら、
 私は幸せだろう。
 そして、美そのものだけのための美で満足できるなら幸せだろう。 (Ⅲ：694-713)

愛に生きる人生は、同時に美を尊ぶ人生だが、そのような人生を生きる事はどうしてもできない。彼の中にある、知りたいという願望はどうしても抑えられないのである。実際は、従来の治療法を改革し、秘薬を使いて人々の病を治療したパラケルススであったが、多くの場合裏切られてしまい、ついには「下品な魔法使い」とまで蔑まれる。

その私は疑いもなく下品な魔法使いだが、これらの敬虔な仕事をくじき、
 君主の治療を邪魔して、彼の剣の中に住んでいる悪魔たちの助けによって、
 天を阻むことに尽力した。 (Ⅲ：468-471)

ここで、「剣の中に住んでいる悪魔たち」とあるのは、彼のいつも身に着けていた剣の柄に隠されていると噂された秘薬(アゾト)のことを暗示していると思われる。その秘薬の効力はまるで悪魔の力をつかったような不思議な力を秘めていると考えられた。また、「君主」というのは、スイスのバーデンでパラケルススが癒した辺境伯フィリップ1世のことで、彼の侍医たちの治療によってかえって悪化していたフィリップ1世の奇病を、パラケルススは彼らとは正反対の治療法で対処した。すなわち、一般的には下痢に対しては下痢止めを使うところを、逆に下剤を使って毒性を浄化し、後は、患者の生命力(アルケウス)に任せたのである。伯爵は回復したのだが、薬をパラケルススが横取りしたと中傷され、報酬も得られることなく退却した。⁷

バーゼルでは高い地位を得て、また多くの患者を治癒に至らせるなどの仕事をしたパラケルススであるが、なぜか彼に対する評価は急激に下がっていった。これが道徳的な退廃を原因とするものかどうか、失敗の真の原因が本人にはよく分らないと嘆く。

私が若いときにより良き事を何故希望したかが、ほとんど分からないように、
 何故私が失敗してしまうのかほとんど分からない。
 私はここでは師ではないことを知っているのみである。 (Ⅲ：523-526)

このように失意の中にあるパラケルススに対して、フェスタスは彼のこれまでの業績の価値を認め、元気を出すようにと彼を励ます立場になっている。これはパラケルススの余りにも大きな野望を嗜めた第1幕と比べると、正反対の立場になっている。フェスタスは、実際パラケルススの目的が大きすぎて、過度の仕事が彼を消耗させ、若さ、健康、愛を浪費した、と考えるが、それでもパラケルススの成功を認め、遅かれ早かれ神からの報いがあるだろうと励ます。フェスタスはパラケルススに、実際多くの人があなただけを讃えているのではないかと語るが、これに対して彼は、友人の保証よりも人々の中にある「好意」を見つけたい、つまり、真の理解者が欲しいと語る。しかし、真に好意を持っている人、自分の医学を受け継ごうとしている人は少数で、彼の話聞きに来た群衆のうち、半分のものは「単なる驚き」と「単なる新奇さ」にひきつけられてきた者たちだ。次に、

「悪魔を途方にくれさせる」、つまり学者として有名になるために、もし奇跡が彼らのために行なわれるならば、それを利用しようという動機の者たち、さらに、既成の学派を嫌い、それを反駁する学者を応援するが、その学者が自らの教義を植えつけようとする、深くうらむ様な多くの連中、次に、パラケルススの医学を時期尚早なもので、短命に終わるものにしようとしている「賢い少数の悪漢」も取り除くと、後は、少数になってしまうと嘆く(Ⅲ：618、619、623、628)。

このような状況でバーゼルに留まるのは言わば茶番劇であるが、劇のカーテンが降りるまでは役割を果たす覚悟は出来ている。「運命は気まぐれで、教授たちさえも落ちる」(Ⅲ：595-6)と感じつつ、パラケルススはバーゼルから追い出される日を予感しているが、「ここに私は立っている。行けと強制されるまでは、ここにきっと私は留まる」(Ⅲ：603-4)と語って、バーゼルでの使命を完遂させようとする。この決意の中の「ここに私は立っている」(“Here I stand”)という言葉は、宗教改革者マルティン・ルターの有名な言葉の反響である。1517年、ルターはウィッテンベルク城教会の扉に「九十五箇条の論題」を張り出して、贖宥状販売を非難しローマ・カトリック教会に異議を申し立てたが、翌年、ウォルムスの国会に召喚されたルターは決して自説を曲げず、最後に「ここに私は立っている。私は他の事はできない。神よ、私を助けたまえ」という言葉で答弁を締め括っている。⁹ 歴史的パラケルススは生涯カトリック教徒であり続け、ルターについては教会を分裂させた者と考えていたので、自分が「医学界のルター」と呼ばれることを好まなかった。それで、この表現はむしろルターに対するブラウニングの尊敬の念の反映であると考えられる。実際、「君はルターに会ったのか」というパラケルススの質問に対して、ブラウニングはフェスタスに「それは驚くべき魂だ！」(Ⅲ：981)と答えさせている。

このような追放されることへの恐れに対しても、フェスタスはパラケルススを励ます。今までのパラケルススの業績がいかに素晴らしいものであっても、今後、現われようとする栄光はもっと大きい、また少数であっても真の理解者があるならば、やがてその数が増えてくるだろう。それ故、たとえバーゼルの人々がその教授を罷免したとしても、大丈夫であると思うと語る。これに対して、先程の言葉とは矛盾するようであるが、パラケルススは自分の教義が受け入れられない理由も実は分っているのだと語る。「私の教義が受け入れられて、結果を結ぶのを妨げている多くの理由は、私の方法と作法、無骨な癖、いらいらした我慢できない魂の中にある。言うべきことが多くあるが、語るための技術が小さいのだ」(Ⅲ：643-6)と語る。つまり、持っていることと、それを現すことは別であることが分かった。つまり、現し方が良くないために真意が伝わらないのである。これは、前に引用した「パラケルスス伝」におけるオポリヌスの証言のように、歴史的パラケルススもバーゼル時代には、実際に飲酒癖などもあり素行が良くなかったようであり、誤解を受けることも多々あったようである。

このような中で、パラケルススはやがて失脚する日が来ることを予感しているが、一方で色々な人の病を癒しており、また自分の医学講義は「可もなく不可もなく役立っている」(Ⅲ：941)と言って、パラケルススは低い目標で満足して、一定の達成感を持っているようである。そうかと思えば、一方では、自分の人生は失敗だと思いつつも、ギリシャのガレノスやアラビアのアヴィケンナなど医学の先人たちを「イスラエルの神々」、すなわち、墮落したイスラエル人が信じた異教の神々であると教え、彼らの誤謬を放置できず、義憤に駆られて権威ある医学書を焼くという過激な行動に出る。歴史的パラケルススも実際に焚書を行なっている。大橋によると、それは1527年6月24日のことである。その日は聖ヨハネ(洗礼者ヨハネ)の祝日で、バーゼル市の広間では聖ヨハネのための焚火が燃やされていた。そこにパラケルススが衆人の見の中で、アヴィケンナの『正典』(Canon)

を含む伝統医学の書籍を燃やしてしまったのである。⁸ このような大胆不敵な行為は、ちょうどルターが破門威嚇の教書を焼き捨て、長い間続いてきた権威を大胆に否定したのと同じだとパラケルススは語り、ルターが長い間、神聖とされ、抗うことができなかつた慣習を大胆に否定したその点に共鳴する。一見、彼の傲慢さを象徴する行為も、実は真の改革を成し遂げたいという切なる思いから出たものかも知れない。だが、ルターとは異なり、パラケルススには真の理解者は増えず、ますます孤立していく。そして、彼は遂にこう述懐する。

否、否、

愛、希望、恐れ、信仰、これらが人間性を作っている。

これらは徴であり、表れであり、特徴である。

そして、これらを私は失った！

(Ⅲ：1027-1030)

第3幕のタイトルが単に「パラケルスス」となっていることと、「愛、希望、恐れ、信仰」を失ったパラケルススには関わりがある。自らの人生の破滅を招かないために、人類に仕え、得たものを不完全であっても人々に与えよとアプライルに勧められ、それに応える生き方をしようとパラケルススはパーゼルの市医兼大学教授になった。しかし、今のパラケルススは、未来に対する強い憧憬を抱いている訳ではなく、低い目標に甘んじて、ある程度満足している状態である。一方で、先人や同輩の業績を認めることもできない彼は、周囲との激しい軋轢を引き起こし、飲酒癖などの素行の悪さもあって真の理解者も得られない。こうして、彼の「憧れ」は完全に止まってしまっている。この章のタイトルが単に「パラケルスス」となっているのは、パラケルススが現在の状況に停滞して、そこに何らの動きもないからである。

第5節 第4幕の構造

第4幕では、パラケルススがパーゼルから逃れて2年後、放浪しつつ医学の研究を続けているパラケルススは、アルサティア（アルザス地方）のホルマルの宿屋兼居酒屋に居る。その場にはアインジーデルンから出てきたフェスタスもいるのだが、まず秘書のオポリヌスに向かって、パラケルススは自分を追放したパーゼルの素早い滅亡を願って乾杯しようと語る。彼は明日にもニュルンベルクに行こうとしているが、秘書のオポリヌスに先にニュルンベルクへ出かけるよう声をかける。やがてオポリヌスが出て行くと、おもむろに「威厳ある司祭」（Ⅳ：34）フェスタスに向かって話し始める。

パラケルスス：……我々の約束が私の良心に重荷となったので、

私は君に使いを出した。

神々が混乱させているパーゼルでの夜を思い出してくれ！

なぜなら、もう一度私は憧れているから。

私は君を私の側に呼ぶ。

君は来た。君は私のメッセージが奇妙だと思ったのか。

(Ⅳ：45-49)

フェスタスはパラケルススからのメッセージを受け取って、ここまでやって来たのだ。この幕のタイトルは「パラケルススは憧れる」となっているが、それは第3章において二重の意味で静止した状態にいたパラケルススが、完全に挫折し、バーゼルから追放されることによって、逆説的にはあるが、もう一度憧れることが可能になったからである。失敗することによって、そこから逆説的に抜け出すことができた。パラケルススは何故バーゼルから逃げていくような状況に追い込まれたかを語る。

フェスタス：彼らは本当に君を追い払ったのか。

私はただ君の医療技術によって癒されたある聖職者についての、曖昧な話を聞いている。

その人は自分の生命が最も価値あるものと知りつつも、君の主張とぶつかった。

そして、その事件に関わっている判事は介入の大義を見なかったし、

君も、彼に対する溢れんばかりの軽蔑を隠す理由も見出せなかった。

また、彼の方でも、自分に向けられた軽蔑に対する怒りを覆い隠す理由が見出せず、

そのことが、とても激しい炎を起こして、その結果、

バーゼルがすぐに君の居る場所でなくなった、と聞いたのだ。

パラケルスス：リヒテンフェルズのことが。

ひどく薄っぺらな物語だ、最後の全く愚かな憤りだ、単なる見せ掛けだ！

私はそれを知っていたし、最初から予告していた。

君が真の忠誠と取り違えた愚かな驚きが、つまり、もっと良きことが起こるだろうという人を元気づける約束が、いかに早くつまらなくなり、過ぎ去っていくだろうかを告げていたのだ。

(IV : 67-81)

結局リヒテンフェルズのことがきっかけになり、パラケルススはバーゼルを追われることになる。リヒテンフェルズはカトリック教会の頭官であったが、胃痛を患っていた。これを癒したものには百グルテンを約束していた。パラケルススは秘薬（ラウダヌム）を数錠使ってこれをいやしたが、報酬として僅かな報酬しか与えられなかった。これに対して、パラケルススは訴訟を起こすが、負けてしまい、法廷を侮辱したため拘束されそうになり、逃亡したのである。パラケルススはこの事件は仕組まれた罠であったと見ている。¹⁰ さらに、パラケルススはバーゼル時代のことを振り返る。パラケルススが不思議な治療を行なって病気を治し、驚きの存在であることに満足している限りは、人々に喜ばれたが、「真理の探究の精神」を教えようとした時に大きな反発を食ってしまった。彼が医学の精神を教えようとした時に、多くの人が篩から抜け落ちるように、去っていった。残ったものもいたが、それはパラケルススの誤りを発見するためだった。というもの、パラケルススの横道、つまり、治療において利用した民間療法が、以前から伝統的にあった魔法の呪文などを推薦するように思われたからである。

この大人しい弟子は私のカモ（騙されやすい者）と見なされていたが、彼の隣人たちがとても驚くところで、誤りをずっと見つけていた様子である。

私を友人と呼んでくれたあの激しやすい医者がそれをやった。

それというのも、かつて誤りであると証明され、適切にも警告とされた私の横道が、

気難しい息子たちではなく、
我々の祖先が安全に歩いた古き良き道を、再び薦めようとしているからだった。
彼の立派な御仁が聖ヨハネの書の色々な詩を発見した。
それは、続けて読めば魂をリフレッシュした。
しかし、後ろ向きに眩かれたら、痛風、結石、疝痛などを癒した。 (IV : 104-115)

しかし、このような状況がパラケルススを孤独に追い込み、多くの人々から偽者と蔑まれる。そして、バーゼルの人々はパラケルススを追放し、新しい教授を迎えた。パラケルススが求めたのは、ただ静かに職を辞することであったが、それでも「別れの一蹴り」を忘れることはなかった。パラケルススは、バーゼルを去る前に判事たちの恥ずべき評決にたいして反論のピラを作って非難したのである。

このように、パラケルススはバーゼルから追放された顛末を回想するが、もう一度新たな目的を抱いて出発しようとする。今まで喜びを犠牲にして、知識を求めて来たことが良くなかったと感じ、今度は喜びと知識の両方を得たいと願い始めた。彼の中には、成功を願っても良いではないかという思いが湧き上がってくる。今は、暗闇のせいで暗くなっているが、突然、光が見える経験がきつとあるはずだ。それゆえ、パラケルススは、たとえ不如意でも最後まで戦い抜くとの意志を表明する。

だが現実には、彼の状況はますます悪化している。彼は心のうちに深い悲しみを感じており、昼間の悲しみを忘れるために、夜に仕事をしている。また、酒を始終飲み続けている。何故打ち捨てられた宝(才能)をもう一度回復して、正しい目的地に達しようとししないのか、というフェスタスの問いに対して、ある長い、そしてかなり解釈の難しい喩えをもって応える。つまり、神から与えられた像(人類に対する神のメッセージ)を運ぶという特別な使命を帯びて、航海していくガレー船がある。乗組員はそれぞれが授かった像を明るい岩に立て、そこに社を築いたが、気がつけば、そこは荒れ果てたむきだしの岩であった。岩の性質について誤解していたのであるが、ひとたび像をそこに置いてしまった以上取り返しはつかない。同様に、自分の人生はもうやり直しはきかないのだ、とパラケルススは答える。それならば、もうアインジーデルンに帰って来て、喜びでなく、むしろ平和を求めよ、というフェスタスの勧告にも、だめだ、故郷に帰っても罪はぬぐわれぬ、と拒否する。

この時、パラケルススは突然ミカルの死を知らされ、衝撃を受けるが、「私は、魂は決して死を味わうことはないと思う」(IV : 678-9)と魂の永遠性を説く。これは自分の死生観を現すものであり、また自らの死に対する備えの言葉でもある。こうして、最後まで笑劇を演じる覚悟をもって、明日はニュルンベルクに出かけ、新しい計画のもと働く覚悟を表明する。

この第4幕のタイトルは「パラケルススは憧れる」である。第3幕は、バーゼル大学教授として真の理解者がいないことに失意の念を感じつつも、自分の活動がそれなりに役立っているという低い目標達成に甘んじていて、実際には人生の動きが止まっていたのであるが、バーゼルを追い出されることによって彼の人生は動き始め、もう一度憧れることができた。ブラウニングは、アブラハム・イブン・エズラ(12世紀ユダヤ人の碩学)に「人生は失敗と見えるところで成功する」(「ラビ・ベン・エズラ」39)と語らせているが、人生の挫折こそ進歩への好機であるという哲学を彼は持っていた。

第6節 第5幕の構造

第5幕は前幕の時点から、すでに13年が経ち、今、パラケルススはザルツブルクの聖セバスチャン病院のベッドに伏していて最期の時を迎えようとしている。そこにフェスタスが見舞いにやって来て、一晩中看病しているが、パラケルスの状態に特に変化はない。フェスタスはパラケルスの生涯を擁護する。確かにパラケルススは罪を犯したかもしれないが、ずっと神の賛辞を求めているのだ、と。フェスタスは「彼を光と生命とに浸してください」(V:66-7)と祈る。やがて、パラケルススは目覚めるが、付き添っている者がフェスタスだと気付かず、自分が話しているのはアプライルだと思っている。これに対しフェスタスは堪らない思いになる。

アウレオレよ、ただ見てくれ！

それは語りか歌か、彼が早口で呟くのは。

彼が私をじっと見つめながらも、始終他の人に話しかけている惨めさ！

もし彼がその意図をくじく、この荒々しい激烈さを抱いているなら！

私は知っている、私はそれらの早口で話された言葉の中に私の名前を聞いた。

ああ、彼はこれから私と分るだろう！

(V:85-92)

やがてパラケルススが目を覚まし、ここにいるのはフェスタスだと言っても、未だにアプライルだと思って語り続ける。

パラケルスス：私と一緒に留まってくれ！

フェスタス：そうしよう、私は君と一緒にいるために、ここに居るのだから。

私は君が昔愛していたフェスタスだ！フェスタスを君は知っている、いや知っているに違いない。

パラケルスス：フェスタスだって！それならアプライルはどこに居るのか。

一晩中、私が聴いたメロディーを彼は優しく歌わなかったのか。

私の胸に冷たい手を置いてもらうことを求めて、彼のところに行くことはできなかった。

だが、私は彼の音楽を十分に理解していた。

十分に！

ちょうど星を光で満たすように、もし彼を魔法の音楽で満たしたら、

そして、彼の罪を全て許したなら、彼らは私をもまた許してくれるだろうことを、私も知るだろう！

フェスタス：フェスタスだ、君のフェスタスだよ！

パラケルスス：アプライル、彼が愛するように、彼は知っているか、

また、私が愛し、かつ知るようになるかどうか、彼に尋ねてみよう！

やってみよう、だが鉛のように冷たい手、ひどく冷たい！

フェスタス：私の手だ、ほら！

(V:107-121)

それでもまだ、相手をアプライルだと思い、その手を握っている。アプライルが側に居てくれたら、

幸せがくるような予感がある。愛に生きたアプライルと共にいれば良いことが起こるような予感がする。私と君と神とはお互いに理解することができると語るパラケルススだったが、程なく神に対する愚痴も出てくる。一体何が間違っていたのか示してくれ。若き日に与えられた超自然的な力を回復したならば、今度は愛と賛辞を得るような人生を送ることも可能ではないかと、神に訴えている。

汝（神）は善なる方、私は満足すべきである。

しかし、まず初めに、私が取えてしたことが間違っていたことを示せ！

むしろ、私の青春期を養った力に対する超自然的な意識を与えよ！

そのような意識を持って、汝と共にたった一時間でも過ごせば、それが助けになる、

ああ、それなのに何が私を妨げるのか。

(V : 266-271)

だが、そのような過去の失敗を贖う機会は既に失われてしまった。それ故、もう一つの世界が存在せず、この世の人生しかないなら、なんと惨めな人生か。それでもなお、確かにパラケルススの魂は上を目指している。

パラケルスス：……もう一つの生が我々を待っていないなら、一人の人間として、それは貧しい誤魔化し、愚かなしくじり、惨めな失敗だと私は言う。

私は、一人の人間として、それに反対の声を上げる、

そして、我々は嘲りをもってそれを投げかえす。

ああ、一人であるけれども上を目指して！

残された時は短いが、なすべきことは多くある。

私は実を持たねばならぬ。

私の骨折りから利益を刈り取らねばならぬ。

(V : 276-282)

この時点でもまだ、アプライルに話しかけていると思っていたが、やっとフェスタスであることに気付く。これに対して、フェスタスはこう語る。

フェスタス：アウレオレよ、君は僕に対する思いも、記憶もないのか？

私はひどく惨めだ、私の純粋なミカルは亡くなった。

今は君だけが私に残されているというのに、私を忘れるのか。

私の手を取り、このように私に寄りかかれ。

アウレオレよ、君は僕を知らないのか。

(V : 333-337)

若い頃からずっとパラケルススの生き振りを見てきたフェスタスは、終始彼の味方であったという立場を堅持し、パラケルススへの忠誠心を吐露する。そして、自分も自我が強ければ、恐らくパラケルススのように罪を犯していただろう、と語る。

ここで、やっとパラケルススはフェスタスに気付き、「私の友、フェスタスよ、君はついに来て

くれたのか」(V:338)と言う。まず初めに、パラケルススは自分の亡骸をステファン教会の一般の人と同じ質素な墓に埋葬してくれるように依頼する。パラケルススは、死の時を意識し始め、人生を振り返り、次第に神のメッセージを語り始める。これに対し、フェスタスはパラケルススの人生を高く評価する。

後の時代の人々は汝の光線のあとを追い、忙しい者らの一群を気に留めず、
汝のみを拝する、傑出し優れた指導者、思想家、探検家、創造者である汝だけを！

(V:389-392)

さらに、何故フェスタスが聖セバスチャン病院に来たかについて、パラケルススはその意義をこう語る。それは、一つの目的のためだ。フェスタスは神のメッセージを受けるために、ここに来ているのだ。神は君にあることを学ばせようと、ここに連れて来たのだ。こう語り終えると、今まさに最期の時を迎えようとしているパラケルススは、静寂な心境で人生を振り返る。

今や、速く人生の嵐が収まったので、
旋風がいかにか大きかったかに初めて気づく。
今は随分ふらふらしている私だが、その時私は穏やかだった、
嵐が最も激しい中でも穏やかだったのだ。

その長く忘れられていた状況が、初めのようにはっきりとしていて、
生々しく甦えるが、ただあの特定の光景だけが現前する。
自分自身は不注意な傍観者であって、それ以上ではない。
無関心だが、おもしろがっている、ただそれだけだ。
そして、これが死というものだ。

私はその全てを理解している。
新しい存在が私を待っている。
私がその中に飛び込む前に、新しい知覚が私の内に生まれなければならない。
その最後は死という問題だ、そして、私が語っている間に、
時々刻々死は力で私を満たしつつある。

(V:472-5, 494-504)

死が近づいている。死の力がパラケルススを満たしつつある中で、パラケルススは、死を自分の意識を超えた「無限の生」(“boundless life”, IV:505)への躍入と捉え、その時に大事なものは新しい存在形態をとることであると悟る。ここで、パラケルススは急に一人で立ち上がろうとする。

パラケルスス：……待て、この姿勢は、このように今にも話そうとしている者にはほとんど適切ではない。私は起き上がろう。

フェスタス：だめだ、アウレオレよ、君は気が狂っているのか。

君は寝床を離れることができない。

パラケルスス：助けはいらない。助けはいらない。君の手さえも。

そうだ！そこに私はもう一度立つ！

寢床から話すのか。

私はこのように講義したことは一度もない。

(V : 545-550)

これは生涯を真理の探究に捧げてきた教師としての矜持である。今伏している、この寝台こそ医学の王座であると感じる。こうしてパラケルススは話始める準備ができる。しかし、もう時間がないので、要点だけを語る。パラケルススは自分が多くの罪を犯したことを認め、神に憐みを求めるが、「私が人類に対してこの身を捧げた時」(V : 598)こそ、幸せな時だったと述懐する。そして、天からの啓示とでもいべきメッセージを語り始める。

世界の秘密は私のものであった。

私は知った、私は感じた、認識したものは表現できないし、

我々の狭い考えでは理解できないが、魂の移り変わりの中で、

否、体の全ての毛穴の中でさえ、ともかくも感じ、知った。

神は何であり、我々は何であり、生命は何であるかを、

神が無限の方法で無限の喜びをいかに味わっておられるかを知り、感じた。

全ての存在が神から生じ、神から全ての力が出てくる、

その中では生命が永遠である、

その最も低い形の存在も神を含んでいるという一つの永遠の至福を、

私は知り感じた。

喜びが宿るところには、神が居られる。

今も、至福の飛点は遠くにあり、幸いは彼方に蓄えられ、

遠くの栄光の天球はよく見えている。

このようにして、喜びはその高嶺へと永久に上り続ける。

(V : 637-652)

パラケルススが人生の最期に臨んで悟った真理は、世界の根底に喜びがあり、その喜びがあるところに神がある、というものであった。すべてのものの中に神が宿っており、この命の天球の完成は人間であるが、その人間も完成している訳ではない。

進歩は生命の法則であり、人間はまだ「人間」(“Man”)ではない。

また、人間の目標がかなえられ、目的が達成され、

彼の本当の力が十分に発揮されたとは、私は思わないだろう。

(V : 742-745)

これは『パラケルスス』の中で最も重要な詩句であり、ブラウニングの思想に一貫している「未完成の哲学」を表明している。例えば、彼の「荒野の死」という作品においては、老ヨハネが弟子たちに向かってこう語る。

進歩、それは人間のみのはっきりとした特徴、神のものでなく、獣のものでない。

神はあり、獣はある。

人間は部分的にあり、全くなろうと希望している。

(586-8)

ブラウニングによれば、進歩こそ生命の法則であり、人間は進歩の最先端に位置するが、その人間も決して完成したのではなく、完成を目指しているだけである。この真理に到達したパラケルススは、自分が人生において成功できなかったのは、知識のみを求めて愛を忘れていたからであることを悟る。こうして愛の優位性に気付くのである。

一つの罪がその初めから、私の人生に汚点を残した。
 私はアプライルを見た、私のアプライルをそこで！
 かわいそうな音楽的哀れな人（アプライル）が彼の心の重荷を降ろし、
 彼の弱さを嘆いて私の耳に入れたとき、私は自分自身の深い誤りを知った。
 愛の破滅は私に、人の財産の中での愛の価値を教えてくれた。
 そして、人の正しい構成の中で、どんな割合を愛は力に対して持つべきであるかを。
 愛は力にまさる。
 力が多ければ、常に愛はそれに勝ってずっと多くなる。 (V : 849-858)

パラケルススは、アプライルに触れることによって愛を欠いている欠点を知った。しかし、直ぐには知識と愛とは一つにならなかった。それ故、パラケルススの人生は、彼の真理の求め方、他者の誤りを許せない性癖、また悪しき飲酒の習慣などによって失敗に終わるが、その失敗を通して、新しい重要な発見があり、こう語る。

私自身の心の中では、愛の微かな始まりを人類の中に探し、
 憎しみでさえ愛の仮面にすぎないことを知り、
 悪の中にも善を見、不運の中にも希望を見つけ、
 人々の半ばの理知、微かな熱望、真理へのぼんやりとした苦闘、
 極めて哀れな誤謬、人々の偏見と恐れ、心配と疑いに同情し、
 それを誇りに思う程には、愛は賢くはされていなかった。
 これら全ては少しだが気高さを持っている。
 人々の誤りにも係わらず、弱くとも皆、上を目指して、
 太陽を一度も見たことはないが、太陽を夢見、どこにあるかを予想し、
 上って太陽に達しようと最善をつくす坑内の植物のような気高さを持っている。
 このすべてを私は知らなかった。
 それで私は失敗したのだ。 (V : 872-885)

パラケルススは、人の弱さの中にも善き点を見つけ、憎しみの中にさえ愛が潜んでいることを理解できなかったことが、失敗の原因があったと気付く。太陽（神、あるいは真理の象徴）を見たことがない人々も上を目指している。どんな者の中にも尊いものがある。それを知らずいたので、失敗したのだと今気付いた。パラケルススは自らの失敗の人生を通して、究極的に何が必要であったかを悟る。今や必要なのは、アプライルとパラケルススの魂を合体させたもの、愛と知識を合体させた第3の性質である。このような認識に達したパラケルススの中には、希望が湧いてくる。確かに彼は人々に誤解され、軽蔑され、自らの内にある「強きもの、真実なもの」(V : 898) は評価されなかった。しかし、まだ希望が全て失われた訳ではない。

パラケルスス：……しかし、後に人々は私を知るだろう。
 たとえ私が暗い巨大な雲の海に沈もうとも、それはつかの間にすぎない。
 私は胸の近くに神のランプを押し付ける。
 遅かれ早かれ、その輝きは暗闇を刺し通すだろう。
 私はある日に現われるだろう。
 私の言っていることが理解できるか。
 私は十分に語っただろうか。

(V : 899-904)

自分が「人のために捜し求めた力は、神の力であったらしい」(V : 847)と気付いたパラケルススは、いつかきっと自らの内にある神の輝きが現われ出で、人々がそれを理解する日が来るに違いないと信じる。こうしてパラケルススはフェスタスに手をとられ、魂においてはアプライルと手に手をとって身罷る。

フェスタス：さあ、安らかに眠るがいい、いとしのアウレオレよ！
 パラケルスス：フェスタス、私の手を、この手を君の手の上に置いてくれ、
 私の真の友よ！アプライル！アプライル、君と手に手を取って。

フェスタス：そして、これがパラケルススであった。

(V : 905-908)

第7節 結論

以上のように『パラケルスス』の構造を分析すると、第1幕での「パラケルススは憧れる」は人類を救う究極的な知識への純粋な憧れを自発的な憧れを自発的に抱いたのに対して、第4幕の「パラケルススは憧れる」は、バーゼルを追放されて、やむなくもう一度憧れるに至ったものであり、互いに状況は異なるが人生に動きがあるという点においては共通する。これに対し、2幕「パラケルススは到達する」では、知識のみを求めた生き方に一つの行き詰まりを感じて、次の一步を模索している段階で終る。しかし、実際には直ぐに新しい動きはなく、第3幕「パラケルスス」においては、傲慢と自己満足のなかで完全に人生の動きが止まってしまう。しかし、追放という外的な力によってもう一度動きが生じ、第5幕「パラケルススは到達する」に至ってパラケルススは自らの失敗の原因を自覚し、ついに本来の到達を経験する。それは、人生における真の達成とは「完成」でなく、むしろ「進歩」であるという逆説的真理であった。「進歩こそ生命の法則」であるからには、進歩のない停滞こそ「墮落(退化)」(“degradation” III : 783)であり人生の失敗である。パラケルススは、現在の人間が完成された「人間(Man)」を目指して成長することこそ人生の眼目であると悟り、知識と愛が融合する世界という新しい理想を抱いて死んでいく。それは、死を超えた来世での「進歩」を期待させるものであり、真の意味での「達成」であると言えよう。

注

- 1) 『パラケルスス』と「荒野の死」、ならびに「ラビ・ベン・エズラ」のテキストとして、*Robert Browning: The Poems*, Vol. I, ed. John Pettigrew (Harmondsworth: Penguin Books, 1981) を使用した。また、本文の解釈に当たっては、*The Poems of Browning*, Vol. I, ed. John Woolford and Daniel Karlin (London and New York: Longman, 1991)、および *The Poetical Works of Robert Browning*, Vol. I, ed. Ian Jack and Margaret Smith (Oxford: Oxford UP, 1983) の注釈を参照した。また、『パラケルスス』の構造に関して、“Appendix IV: Monclaire on Paracelsus” (*The Browning's Correspondence*, Vol. 3, ed. Philip Kelley and Ronald Hudson, Winfield: Wedgestone P, 1985) pp. 416–424から示唆を与えられた。
- 2) *The Poems of Browning*, Vol. I, p.103.
- 3) Sutherland Orr, *A Handbook to the Works of Robert Browning* (London: G.Bell and Sons, 1937) p. 22.
- 4) *Paracelsus: Selected Writings*, ed. Jolande Jacobi, trans. Norbert Guterman (Princeton: Princeton UP), p. 4.
- 5) 石田友雄『ユダヤ教史』(東京: 山川出版社、1980) pp. 294–295.
- 6) 種村季弘『パラケルススの世界』(東京: 青土者、1996) p. 186.
- 7) 大橋博司『パラケルススの生涯と思想』(東京: 思索社、1976) pp. 37–38.
- 8) 大橋博司、pp. 51–52.
- 9) 小池辰雄『聖書の人ルター』(東京: 小池辰雄著作刊行会、『小池辰雄著作集』第七巻、1984) p. 95.
- 10) 大橋博司、p. 58.